

こんなにあった duplicate books

—中京大学図書館（名古屋）

洋書における重複の現状—

板 垣 和 美

1. はじめに

一昨年秋の発刊以来、今なおベストセラーにランキングされている『ノルウェイの森』（村上春樹著）。勧められるまま友人に借りて上下巻2冊を一気に読み終えてから、オブラートに包み込まれたやさしい物哀しさをどうしても手元に残したくて、すぐに書店で買い求めた。小説の内容もさることながら、柘ひいらぎと真っ赤なキャンドルを彷彿とさせる鮮やかな色彩の装丁がとても気に入り、プレゼントにも最適と思い、すぐまた2セット追加して買ってしまった。暫くの間、私の部屋の黒い本棚には4セット8冊の『ノルウェイの森』が並んでいた。deep-green と deep-red を交互に並べたり、4冊ずつ同色でまとめたり、或いは red を green の間に置いてみたりしながら毎日配色を換えて楽しんで、「複本で、こんな風にして遊ぶこともできるんだ」などと思いながら。

しかしこれはあくまでも個人的な趣味の範囲で許されることであって、より多くの情報を有効に提供していかなければならない図書館においては、複本は微妙な存在といえる。ユーザーのニーズに応じて用意された複本であれば問題はないが、そうでない場合、複本はそのまますぐに死蔵に結びついてしまう。そこで、図書館における複本の意味について考えてみたい。

2. 複本の発生と問題点

まず、複本がどのように生じて来るのか、発注の段階を見てみよう。本学図書館では発注時の重複チェックは各学部に一任しており、実際の発注も各学部が独自に行っている。そのため図書館は、各書店から図書資料が納品されるまで発注状況を把握できないわけである。受入れのルートは名古屋学舎では、文学部国文学科、同英文学科、同心理学科、及び各大学院、法学部及び同大学院、商学部及び同大学院、経済学部、教養部、図書館、また豊田学舎では、体育学部及び同大学院、社会学部、豊田図書館、そして購入の他に寄贈、個人研究図書の返却と、非常に多岐にわたり複雑である。しかも新しく学部が設置される際には、通常の図書資料費とは別の予算が生まれ、多量の資料が短期間に流れ込んでくる。ここ数年のうち、1986年4月豊田学舎に社会学部（社会学科）が、翌1987年4月には名古屋学舎に経済学部（経済学科）が増設された。

社会学部図書の整理は UTLAS の本格導入と共に始まり、1985年6月から約8か月間で3,500冊余りを集中処理した。経済学部設置に際しては、1986年1月から同年8月にかけて、約3,000冊を受入れ、整理した。選書の段階で担当業者に重複チェックを依頼した結果、当館既存図書との重複が比較的回避された反面、多くの図書が重複して納品されるということがあった。2冊同時納品であれば当然1冊は直ちに返品できるが、数週間前後して納品されると、整理業務にまわってきて重複チェックするまで気がつかないこともある。しかも UTLAS で目録カードを作成する場合2週間のタイムラグはどうしても避けられないので、書名目録での重複チェックでは複本であることがわからず、UTLAS で検索して初めてその図書のデータが既にファイルされていることが判明することが度々あった。

本来重複チェックは、選書から発注に至る段階で行われるべきものであるが、前述の様に図書館による発注管理が全くなされていない現在、フリーパスで受入れ処理を通過してしまった資料は、整理業務担当者の手元に回って

きて初めて重複チェックの洗礼を受けるのである。


名古屋図書館では、豊田図書館にある資料も検索できるように、閲覧者用の分類目録と書名目録に、豊田図書館の目録カードを混配している。洋書整理に関しては、豊田学舎を構成する社会・体育の2学部及び教養部が購入し、豊田図書館所蔵となる資料についても、名古屋図書館で一括集中処理しているため、豊田図書館で受入れられた資料も、名古屋図書館での重複チェックからその整理業務が始まる。豊田学舎にある学部が継続購入している一連のシリーズを、名古屋学舎にある別の学部が1年遅れて購入するなど、両館で同じ資料を受入れることは多々あるが、これらのケースは所蔵館を異にするため重複とはみなさず、個々に処理し各々の目録カードを作成している。しかしこの場合、閲覧用の分類目録、書名目録のカードボックスには豊田所蔵資料の目録カードは入れず、名古屋、豊田両館にあるという所在が明らかになるよう、ロケーションの表示だけしている。いたずらに目録カードをふやさないための手段である。

名古屋図書館閲覧室の書名目録から

①名古屋と豊田で同じ資料を所蔵している場合

名古屋図書館 館書庫	780.13 P 71	Play, games, and sports in cultural contexts / edited by Janet C. Harris, Roberta J. Park. -- Champaign : Human Kinetics Publishers, c1983. xi, 521 p. : illus. ; 24 cm.
	→ MAIN	
豊田図書館 書庫	→ TMAIN	
		Includes bibliographies and index. 0208758 LC: 82083148 ISBN: 0931250366
		HOLDINGS: MAIN
		1. Sports - Social aspects - Addresses, essays, lectures. 2. Games - Social aspects - Addresses, essays, lectures. 3. Play - Social aspects - Addresses, essays, lectures. I. Park, Roberta J., ed. II. Harris, Janet C., ed.
		89 CULA
		0021 87JUN01 50860277
		PRODUCED IN CANADA BY UTILAS INC.
		PRODUIT AU CANADA PAR UTILAS INC.

②豊田図書館所蔵の図書

492.123 D 71 TMAIN	Dibner, R. D. Phonokardiographie in der Sportmedizin / R. D. Dibner. -- Leipzig : Johann Ambrosius Barth, 1972. 191 p. : illus. ; 25 cm. -- (Sportmedizinische Schriftenreihe ; Bd. 7) Summaries in English, German, and Russian. Bibliography: p. 188-103. 0443269 HOLDINGS: TMAIN I. Phonocardiography. I. Title. II. Series.	
27 CULA <small>PRODUCED IN CANADA BY UTLAS INC.</small>		0023 87AUG24 50861050 <small>PRODUCE AU CANADA PAR UTLAS INC.</small>

1985年4月、洋書整理にUTLASを正式導入してから既に4年がたとうとしているが、これまでに17,000件弱のレコードを構築し、カードを作成してきた。(1988年11月末現在)それに伴い目録カードの枚数が急激に増加し、1タイトルにつき2~3枚の続きカードが目立つようになった。UTLASで洋書整理をしている日本各地の大学や研究所の図書館の担当者が集まり、日常、端末を操作していて直面する問題点を提起し、お互いの経験から意見を交換し合う会が1986年来設けられているが、そこでも、UTLASカードの枚数が他に比較し多いのではないかという問題点が指摘された。立教大学の調査によると、1439件のタイトル数の内、約50%にあたる710件が2枚以上のカードになっているという。(1986年11月の第1回UTLASユーザー実務担当者の会での発表より)当館ではこれまでの所、UTLASカードの枚数について正確な数値は把握していないが、タイプ打ちのカードと比較すると、特に注記エリアにおける書誌注記等の記述内容が増えている上、一般件名や地理件名もカード上に印刷しているため、続きカードが占める割合は、おそらく立教大学の示した数値を上回るであろうと思われる。

現在当館では、1990年4月本稼動を目指し、発注・受入・整理・閲覧・統計までのトータルシステムで図書館電算化計画を進めているが、ユーザーのオンライン検索が可能になるまでは、目録カードの作成は続くわけである。既存のカードボックスの限られたスペースにカードを入れなければならないため、前述のロケーション表示で省スペース化を図ると同時に2館の蔵書内容を把握しようとしているのだが、書名目録での重複チェックが100%完璧であるとは言えず、未整理で滞架している図書との重複は避けられるものではない。また、UTLASカードがその作成と輸送に2週間という時間を要するため、既に該当する図書が整理されているにもかかわらず、書名目録チェックできずUTLASでの検索で初めてデータの所在を知ることもある。

3. 重複の現状

3-1 調査の対象と方法

これまでは、日常業務の中で重複の頻度が多い現状を「好ましくない傾向だ」と指摘することはあっても、発注の一本化がなされていない現在の業務体制では解決方法もなく「蔵書印も押してしまったし、登録番号も付与してしまったから仕方がない」という程度で見過ごしてきていた。確かに各学部、大学院に発注を一任している現行の方法では重複が皆無になるのは不可能であるが、重複回避への関心を促すためにも、重複の実態を明らかにする必要性を感じ調査を試みた。

調査の対象は、名古屋図書館、並びに総合資料室、法学部資料室に所蔵されている資料の内、単行書として整理された洋書（但し、キリル文字による資料は除く）で、資料形態は具体的に次の通りである。

- ① 図書、パンフレット、地図帳
- ② 地図資料
- ③ 録音資料（レコード、録音カセット etc.）
- ④ 映像資料（映画フィルム、美術原画、フィルムストリップ、ポスター、スライド etc.）

⑤ マイクロ資料（マイクロフィルム、マイクロフィッシュ、ロールフィルム etc.）

②～⑤の資料の重複は極めて稀で、2～3件にとどまったため、これから言及することは図書資料に限定されることになる。

作業の方法として、まず事務用の書架目録カードで蔵書の総冊数を数え、その際複本の目録カードをピックアップし、その冊数をカウントする。次に書庫でカードと現物を照合させ、重複している2冊、あるいは3冊の図書の受入年のタイムラグ、並びに購入経路が同一かどうか等をチェックした。

3-2 複本の基準と重複処理

当館では、複本の基準並びにその処理方法について、次の様に取り決めている。

① 複本の基準

複本にするためには下記の条件を満たすこと

- a. 同一著者
- b. 同一書名
- c. 同一版次
- d. 同一出版地
- e. 同一出版者
- f. 同一ページ数（特に本文ページ）
- g. 同一の大きさ
- h. 同一の装丁

※注1

刷が異なることによって出版年が相違していても、上記の条件を満たしていれば複本とする。また表示が「版」となっている場合でも実質的に「刷」を意味する場合は複本とみなす。

※注2

同一出版者の出版物であっても、大きさや装丁の異なる資料は、利用目的や利用対象をそれぞれ持っていることが多いため、複本とはみなさ

ない。また、一方が双書に属し他方が属さない場合や、双方とも異なった双書に属する場合は複本としない。

※注3

ハードカバーとペーパーバックの取り扱いについては、ISBN を判断の基準とし、各々が異なった ISBN を持っている場合は複本として扱わない。

② 複本処理

上記の条件を満たしている時は次の様に処理する。

a. 同一出版年の場合

登録番号の若い方を基本とし、他方を複本とみなす。基本となる資料の目録カードを一枚複写し、分類番号の上に Duplicate を示す㊤印を押す。基本資料の登録番号を消して、複本の登録番号を記入する。

b. 出版年が異なる場合

登録番号に関係なく、刷の若い方を基本とし、他方を複本とみなし、aと同じ様に処理する。

以上のマニュアルに基く重複処理は1980年度から行われ始めたが、それまでは明確な基準が設定されていなかったようである。

目録カードの枚数を数え、その中で複本から占める割合を算出すればいいのだから簡単な作業であろう、と安易な気持ちで始めてみたものの、8万冊にのぼる蔵書の正確な数値を把握するのは、決して容易なことではないと思われ知らされた。と言うのも、スタンダードな重複基準が存在しなかった1979年度までの複本は、曖昧な判断により様々な方法で処理されているため、本来ならば蔵書構成を正確に把握し得るはずべき書架目録がその役割を果たしておらず、書庫にはいって該当する図書の数を確認しなければならなかったからである。本の大きさや装丁が全く異なっている2冊の図書が重複とみなされ、1枚の目録カードの左下に各々の登録番号を列記しただけのケースがあるかと思えば、刷が違うだけでこれは完全に複本であると思われる図書のカードが別に作られていることもあり、無法下で作られた曖昧な目

録カードに翻奔されながら蔵書を確認していった。

本学図書館では毎年蔵書目録を作成・発行しているが、洋書に関してはこれまでに『経済・財政・統計編』（1980年）『語学編』（1981年）『英文学編Ⅰ・Ⅱ』（1983年）『文学編』（1985年）『工学・産業編』（1987年）を刊行し現在1989年度発行の予定で『芸術編』の作成業務を行っている。1981年来、蔵書目録収録の対象となる分野の資料は先ず最初に蔵書点検をし、分類、標目、記述等で問題のあるものはすべて再整理をしているため、5類から9類までの資料については、事務用の書架目録でほぼ正確な蔵書冊数や複本冊数がかめると言えるであろう。しかし、0類（総記）1類（哲学）2類（歴史）3類（社会科学）4類（自然科学）に関しては、これまで蔵書点検が行われていないため、蔵書の実態を把握するのは極めて困難であり、目録カードも不完全なものが多く、複本を調べるのに予想以上の時間と労力を費した。とは言っても、ここ2～3年で整理された資料の中でも、標題紙裏に押されている受入印に請求記号を記入し、ラベルを貼って配架しただけで、カード上の複本処理がなされていないケースがあった。経済学部設置のための大量図書の集中処理に際して生じたケアレスミスである。基本となる目録カードを複写して㊦印を押し複本の登録番号に訂正するという重複の事後処理をしながら、遅々とした歩みで作業を進めた結果、次の数値が現われた。

3-3 調査結果の分析と考察

詳細については順を追って分析していくこととして先ず各分野における重複の比率を見て頂きたい。(表1、図1)社会科学と文学は特にその蔵書数が多いため、第2次区分の別表も参照してほしい。(表2)

8万2千弱の蔵書の内、5千余冊の資料が重複、つまり100冊中6～7冊が複本ということになる。この数字からどの様な印象を受けられるであろうか。書架一段に平均して25冊の図書が配架されているとしよう。どの段にも1組ないし2組ずつ同じ図書が並んでいることになる。ユーザーのニーズに応じて生まれた重複であれば問題はないのである。が、今日までの複雑多岐にわたる発注体制が必要以上に複本を増加させているとすれば、重複率が

表1 <各主題の重複の割合>

類 (NDC 7版)	総冊数	複本冊数	総冊数に占める 複本冊数の割合	備考
0 (総記)	6,513 ^(冊)	163 ^(冊)	2.50 ^(%)	+マイクロフィッシュ 1,441シート
1 (哲学)	5,738	493	8.59	
2 (歴史)	5,051	142	2.81	
3 (社会科学)	27,498	2,088	7.59	+ロールフィルム 73リール
4 (自然科学)	2,526	120	4.75	
5 (工学)	1,471	56	3.81	
6 (産業)	2,913	307	10.54	
7 (芸術)	1,178	64	5.43	
8 (語学)	5,912	883	14.94	+録音資料57件 +映像資料65件
9 (文学)	23,131	1,037	4.48	
計	81,931	5,353	6.53	

※注 備考欄に記したマイクロ資料、視聴覚資料は、形態が多様であるため図書資料とは別にカウントした。

図1 <各分野の100冊中における複本冊数>

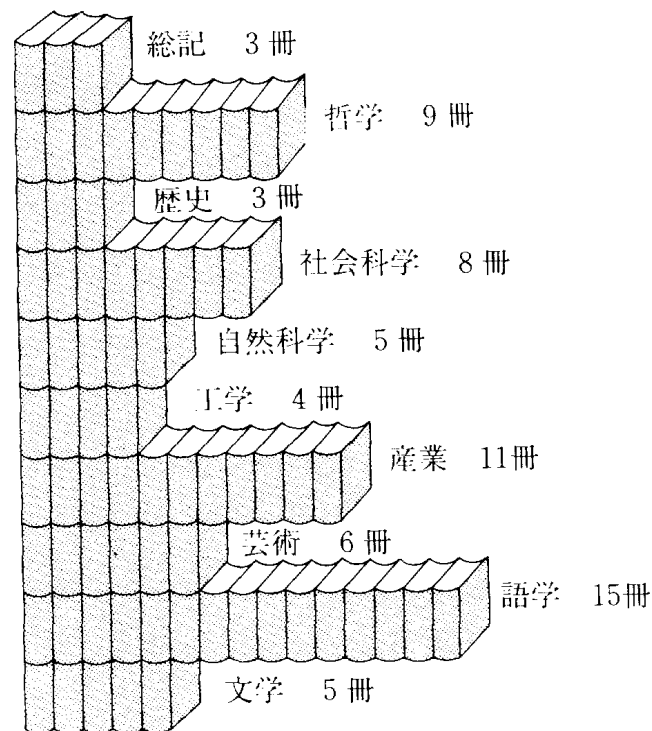


表2 <社会科学における重複の割合>

綱	総冊数 (冊)	複本冊数 (冊)	重複率 (%)
300 (社会科学)	1,385	41	2.96
310 (政治)	2,441	142	5.82
320 (法律)	6,364	461	7.24
330 (経済)	12,026	1,126	9.36
340 (財政)	455	36	7.91
350 (統計)	128	10	7.81
360 (社会学) (社会問題)	2,711	165	6.09
370 (教育)	1,363	81	5.94
380 (風俗習慣) (民俗学)	463	17	3.67
390 (国防・軍事)	162	9	5.56
計	27,498	2,088	7.59

<文学における重複の割合>

綱	総冊数 (冊)	複本冊数 (冊)	重複率 (%)
900 (文学)	2,558	39	1.52
910 (日本文学)	203	6	2.96
920 (中国文学) (東洋文学)	27	2	7.41
930 (英米文学)	17,514	926	5.29
940 (ドイツ文学)	1,393	18	1.29
950 (フランス文学)	1,084	39	3.60
960 (スペイン文学)	21	0	0
970 (イタリア文学)	26	0	0
980 (ロシア文学)	68	0	0
990 (その他) (諸国文学)	237	7	2.95
計	23,131	1,037	4.48

10%を越える産業や語学の分野では、本来ならば10件の情報が収容可能なスペースに実質9件の情報しか持ち合わせていないことになり、財政面でも設備面でもこのロスを見過ごすことはできない。他の分野と比較して特に重複が際立っていたこの2分野の蔵書構成を更に詳しく見たのが次の表である。

表3 <産業における重複の割合>

網	総冊数 (冊)	複本冊数 (冊)	重複率 (%)
600 (産 業)	111	5	4.50
610 (農業・農学)	485	34	7.01
620 (園芸・造園)	29	0	0
630 (蚕糸業)	0	0	0
640 (畜産業) (畜獣医学)	25	1	4.00
650 (林 業)	13	0	0
660 (水産業)	24	5	20.83
670 (商 業)	1,947	244	12.53
680 (交 通)	253	18	7.11
690 (通 信)	26	0	0
計	2,913	307	10.54

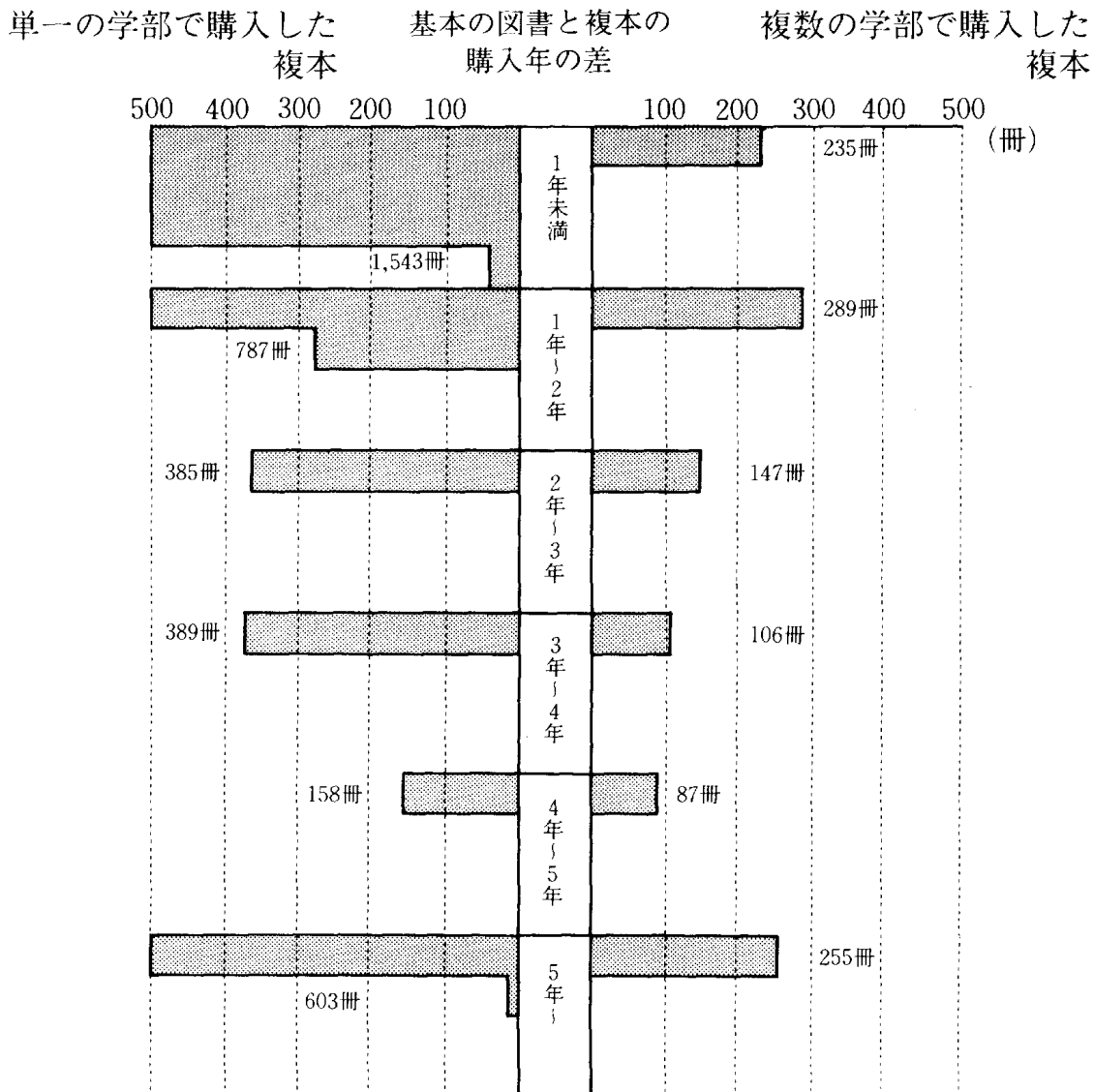
産業の内、水産業が20%の重複率を示しているが、元々僅かな蔵書数から算出された数値であるため、ここでは問題外であるとしても、商業関係の資料は複本が1冊にとどまらず、2冊から4冊もあるケースが多く、これが重複の比率を高める要因となっている。

<語学における重複の割合>

網	総冊数 (冊)	複本冊数 (冊)	重複率 (%)
800 (語 学)	2,064	279	13.52
810 (日 本 語)	84	1	1.19
820 (中 国 語) (東 洋 諸 語)	79	2	2.53
830 (英 語)	2,501	505	20.19
840 (ドイ ツ 語)	478	30	6.28
850 (フ ラ ン ス 語)	360	41	11.39
860 (ス ペ イ ン 語)	50	1	2.00
870 (イ タ リ ア 語)	27	2	7.41
880 (ロ シ ア 語)	99	7	7.07
890 (そ の 他) (諸 国 語)	170	15	8.82
計	5,912	883	14.94

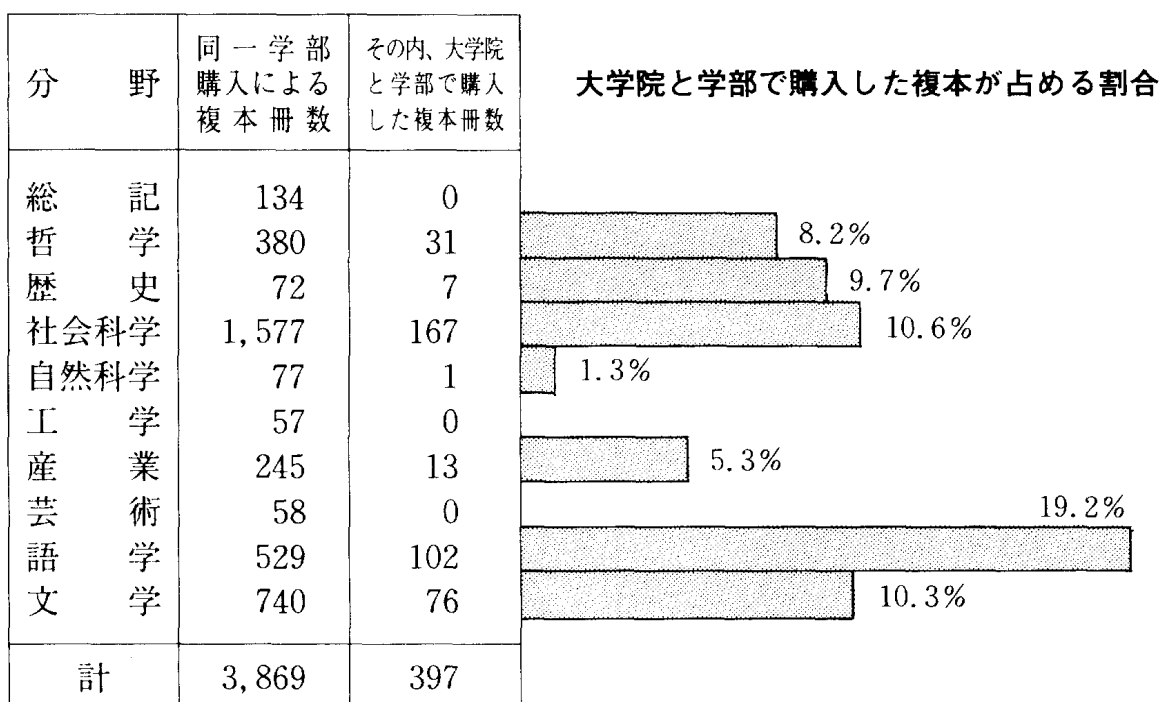
語学の中では英語学が他の諸言語を圧倒して高い重複率を示している。事務用の目録カードを数えて複本冊数を調べていた時点では、英語学関係の図書に対するニーズは英文学科を匹頭に、教養部や他の複数学部からも生じるであろうから、複本もそれに比例して多くなっているのだらうと思われたのだが、書庫で個々の重複のケースについて調べていくうち、この推測が間違いであることが判明した。つまり複数の学部からの要求で複本が生まれているわけではないのである。これは、英語学に限らず、あらゆる分野に該当する傾向であり、しかも同じ年度内に生じた重複が最も多かった。

図 2



前ページの図2は、基本の図書と複本、各々の購入学部（大学院）が同じ場合と異なる場合を、2冊の受入年の差に分けて表わしたものである。受入年は標題紙裏、もしくは奥付にある図書館受入印に記載された年で、発注時からのタイムラグも考慮して1年未満に購入したものから、5年以上たってから購入したものまでを年単位で区切った。また文学部は英文・国文・心理各学科の研究対象分野が全く異質であるため、例えば英文と心理で重複しているケースは複数の学部で購入したものとしてカウントした。本学の学部構成から推察すると、分野によっては異なる複数の学部によって購入された複本の方が多いのではないかと思われるのだが（特に法学・経済学等）同一学部による短期間での重複購入が極めて多いことがわかる。発注から受入・整理を経てカード目録が完備されるまでのタイムラグも起因しているであろうが、発注段階での重複チェックが疎かにされていることが主因であるのは言うまでもない。図書館業務の電算化を図ってもこのタイムラグは回避できるものではないので、今後は発注時において蔵書内容を正確に把握することが重要となるであろう。

図3

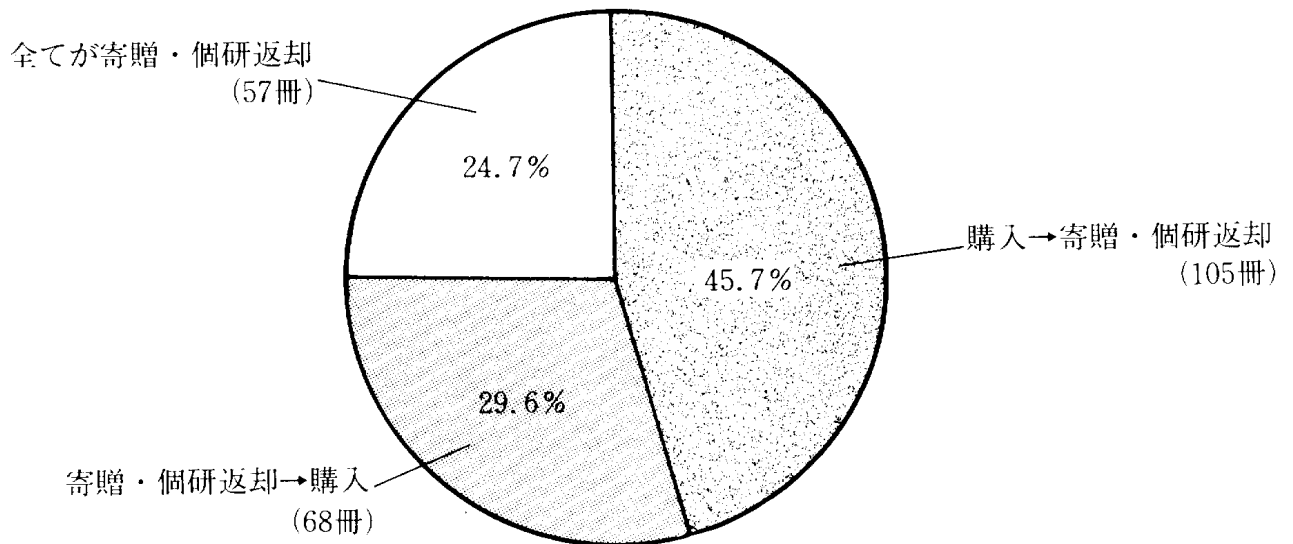


次に学部と大学院での重複の比率を見てみよう。図3は、前出のグラフの左側でカウントされた単一学部での複本の内、例えば英文学科と、大学院文学研究科英文学専攻（以下大学院と略す）とで同一の資料を購入した場合の複本冊数を分野別に示したものである。

学部が購入する資料に関しては、学部配分図書費（次年度から図書館資料費に名称変更）の費目で図書館予算内に組み込まれているため、発注一本化への移行や各学部図書費の管理も容易に行えるであろうが、大学院に関しては全く別枠の予算が組まれるため、発注に際して図書館が介入するのは困難であろう。現在、文学（国文・英文）法学・商学・体育学の各研究科に80万円から650万円の大学院図書費が設定されている。各分野の複本を調べてみてわかったが、やはり大学院設置を申請し認可決定を受けた年の前後1～2年間で学部と重複して同一の資料を購入しているケースが極めて多い。1969年商学研究科開設時には3類の経済、6類の商業で複本が増加、1971年文学研究科（心理学専攻）修士課程増設時には1類の心理学、そして1982年同（英文学専攻）修士課程増設時には8類の英語学と9類の英文学という様に各々の研究対象となる分野での重複購入が多かった。（但し心理では大学院予算の図書費を設けていないため、学部購入での重複となっている。）全分野で平均10%を占める学部と大学院での重複が本当に有意義なものであるのか、単に別予算だからということによって生じた重複であれば今後改善に向けて一考する必要がある。また、今後大学院社会学研究科、経済学研究科の増設も当然予想され得る事柄であることから長期ビジョンに基いた発注体制の見直しが望まれる。

購入以外のルートで受入れられた資料、つまり寄贈や個研返却による資料は重複にどのように係っているであろうか。外部機関、或いは学内、学外の個人からの寄贈や本学の現旧教職員からの個研返却で受入れられた図書の内、重複に係るものは230冊あった。この数字は厳密には基本の資料にあたるものも含んでいるので複本冊数は若干少なくなるが、全複本冊数の約4.3%を占めている。重複のパターンとしては、購入して受入れられた図書と重複し

グラフ4 <寄贈本、個研返却本の重複パターン>



ているものを寄贈或いは個研返却で後から受入れたケースが45.7% (105冊) これとは逆のケースが29.6% (68冊) 基本の資料も複本も寄贈或いは個研返却で受け入れられたケースが24.7% (57冊) になっている。最後のケースは異なるルートで重複している場合と、同一ルートで始めから重複して寄贈される場合に大別されるが、特に後者の場合複本が5冊以上もあるケースが目立った。また、先に購入し、後で寄贈されて重複している場合、2冊の受入年に10年以上の差があるケースが多く、かつては寄贈本、個研返却本は重複チェックもせず全て受入れていたことがわかる。ここ数年来、重複チェックも徹底し、複数の寄贈本はその利用価値を考慮した上で不必要なものは受け入れないことにしているため、今後これまでの様な無駄な重複はなくなるであろう。

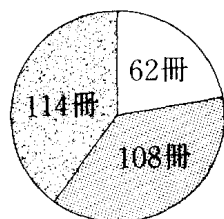
複数の複本は寄贈の場合に限らず購入による重複でも大きな比率を占めており、複本総数5353冊の内8%にあたる426冊が“複本の複本”になるわけである。基本の図書を含め3冊以上重複している図書の各々の購入学部、並びに受入年の差を調べたところ、1～2年の間隔で同一の学部が購入しているケースが際立って多かった。

表4 <3冊以上が重複しているケース>

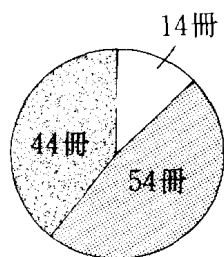
			すべて同じ 年に購入	同 じ 年 + 違 う 年	すべて違う 年に購入	計
学部が購入 すべて同一	複 本 冊 数		62冊	108冊	114冊	284冊
	このケース内の比率		21.8%	38.1%	40.1%	100%
	全体に占める比率		14.6%	25.4%	26.8%	66.8%
違う学部 + 同じ学部	複 本 冊 数		14冊	54冊	44冊	112冊
	このケース内の比率		12.5%	48.2%	39.3%	100%
	全体に占める比率		3.3%	12.6%	10.3%	26.2%
学部が購入 すべて違う	複 本 冊 数		1冊	6冊	23冊	30冊
	このケース内の比率		3.3%	20.0%	76.7%	100%
	全体に占める比率		0.2%	1.4%	5.4%	7.0%

図5

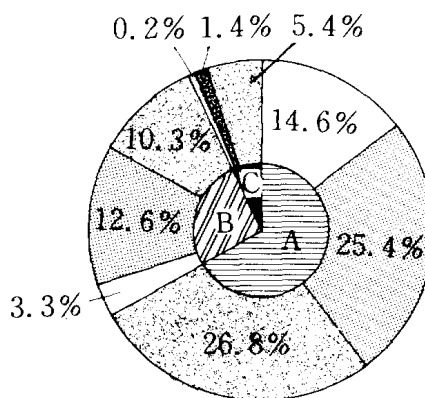
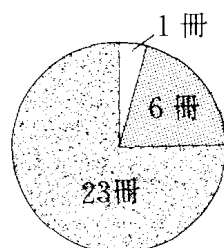
㉠ 3冊(以上)の図書を同じ学部で購入



㉡ 3冊(以上)の図書を同じ学部と違う学部で購入



㉢ 3冊(以上)の図書をいずれも違う学部で購入

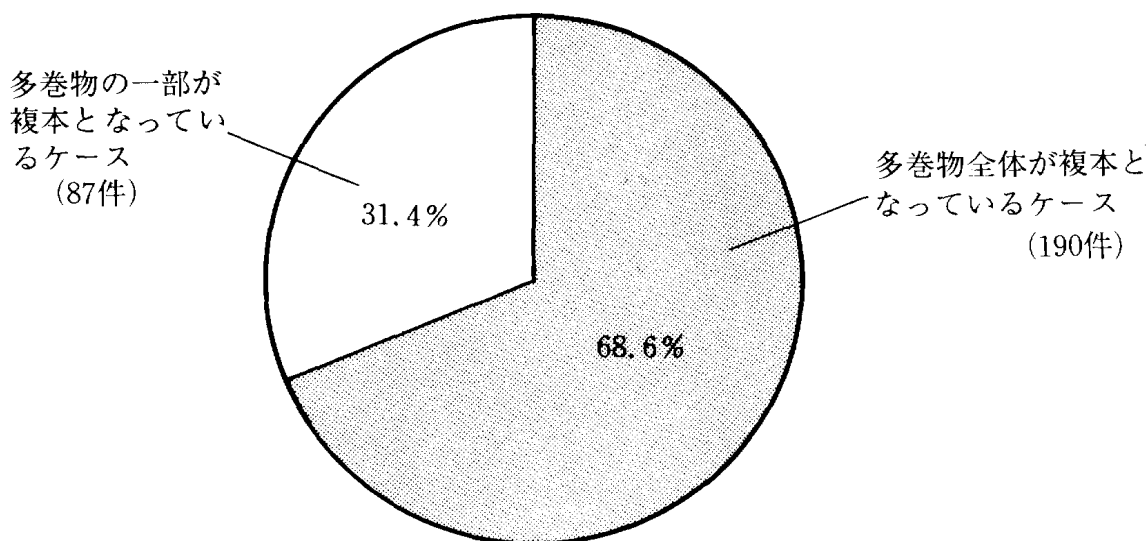


- 3冊(以上)とも1年未満に購入
- 同じ年に購入したものと違う年に購入したものがある
- 3冊(以上)とも違う年に購入

また購入学部が複数多岐化するにつれ、受入年の開きが大きくなる傾向が見られた。3冊同じというケースが最も多かったが、経済・商業・体育・英語学の分野では5冊から7冊も同じ図書が重複しているケースが各々2～3件ずつあり、いずれの場合も同一学部購入であった。多巻物が1巻からラストまで揃って数セット並んでいることもある。語学の分野では6巻物が3セット（同一学部が購入）4巻物が5セット（2セットは寄贈、3セットは同一学部が購入）書架の半分を埋め尽くして綺麗に並んでいるのである。しかも配架以来一度もユーザーの手に触れていないのではないかと思わせる有様で。数セットが重複しているケースはこの他に歴史関係でも2、3件見受けられた。

多巻物の重複は全部で277件あり、その内約70%にあたる190件はセット全体が揃って複本となっているケースである。（図6）（但し、ここで取り上げた多巻物は、その内容に連続性がある物で、便宜上シリーズで整理されていても内容が個々に独立している多巻物はカウントしていない。）この場合基本のセットと重複しているセットの購入学部は同じであることが多く、多巻

図6



物の一部のみ重複している場合、その複本だけ個研返却、もしくは他の学部が購入しているケースが目立った。数年来継続図書として購入しているシリーズで重複しているものも2、3件ある。その内1件は2年程前から1冊ずつになっているのだが、今だに重複して継続購入しているものもありその必要性に疑問を抱いた。

これまで重複の様々なケースを紹介し、浅学な私見を述べてきたが、ここで複本の基準からはずれものの重複に準拠すると思われるハードカバーとペーパーバック、出版地を異にする同一出版者による資料について若干考えてみたい。前にも述べた通り、ハードカバーとペーパーバックの場合各々に異なるISBNが付与されていれば複本扱いはせず、個々の目録カードを作成している。また出版者が同じでもアメリカで出版されたものとイギリスで出版されたものは、複本の基準の項目d (p. 61 参照) の条件に該当しないため別々に処理される。しかし資料の情報内容そのものはハードカバーとペーパーバック、またアメリカ出版のものといギリス出版のもの間で大きな相違はなく、その意味で重複という概念に適合するであろうと思い、参考までに各々のケースをカウントできる範囲で調べてみた。と言うのは、前にも述べた通りこれらのケースは目録カード上では各々独立したものであるため、勿論前後して配列されてはいるものの、絶対に見過ごしてはいないと断言できるわけではなく、接架して気付いたケースをチェックしただけなのでこの数値はあくまでも概数として見て頂きたい。

ハードカバーとペーパーバックについては全体で116件あり、経済学と英文学で特に目立ったが、この2分野は蔵書数も多いためそれに比例していると思われる。出版国が違うものは14件で、アメリカとイギリスで出版されているものの他、アメリカと西ドイツで出版されているケースが多い。

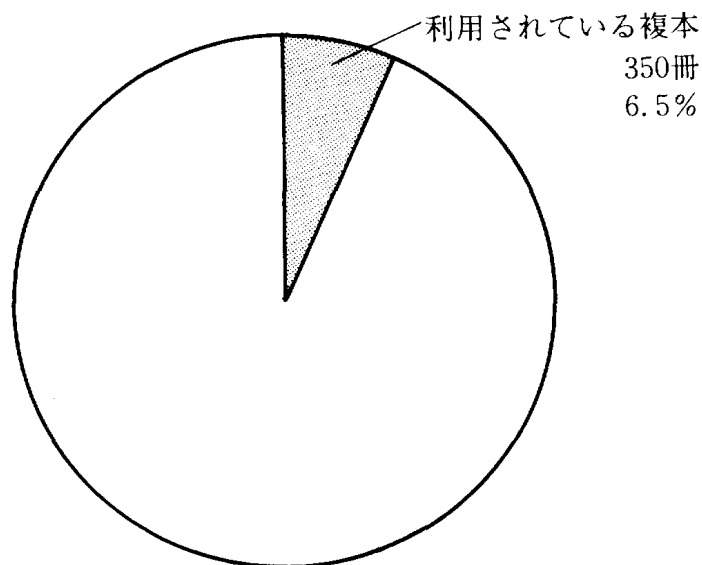
4. まとめ

今回の調査では、名古屋図書館所蔵の洋書について重複している資料を網羅的に把握しなかったのが、現物がなく調べられなかったものが350

件あった。この内訳は教職員による貸出中162冊、総合資料室、法学部資料室等学内の他機関への貸出66冊、学生、院生の貸出或いは紛失(?)等により所定の場所になかったもの122冊となっている。教職員の図書帯出に際しては台本板を入れるため正確な冊数が把握できるのであるが、学生や院生に貸し出した図書については、閲覧カウンターで資料請求書を調べなければならず、今回はこの追跡調査に費やす時間がなかったためその数はわからない。また、これまでに当館で刊行した蔵書目録の収録対象となった工学・産業・芸術・語学・文学の5分野については各々作成の第一作業として蔵書点検を行ったが、上記以外の分野は今までに一度も点検されていないため実態は明らかではないが、紛失した図書もかなりの数にのぼると思われる。

これら350冊は実際利用されている、もしくは利用されていたものとみなし、複本の利用度の実態を示したのが図7である。ユーザーのニーズに即時に対応できるよう用意されているべき複本がわずか6.5%しか利用されていないというのが残念ながら本学図書館の現状であり、5,353件の重複がその必要性に応じて生じたものではないことが判明したわけである。

図7 <複本の利用度>



利用頻度が高く、あらゆる学術の分野で必要とされる資料であれば、書庫という空間的な許容範囲で2冊でも3冊でもユーザーのニーズに即応できるように購入すべきであろう。しかしこれまでの様な多岐にわたる発注ルートがいたずらに産んだ複本は、その多くが費用と空間の膨大なロスを生じさせてしまっている。発注の一本化が早急になされるべきであることは言うまでもない。今後は無用な重複を回避していくと同時に、これまで蓄積されてきた複本をこのまま所蔵しておく意味があるのかを検討し、不要なものは積極的に廃棄していくべきであろう。

本学名古屋図書館の蔵書冊数は40万弱である。現在の書庫の収納可能冊数は50万冊。10万冊分のスペースはまだあるとは言え、あまねく全書架にゆとりがあるわけではなく分野によっては既に満杯になってしまっている書架も少なくない。整理済みの新刊本を配架する度、最後の1冊のスペースがないために大掛りな移動をしなければならないこともある。書庫拡張を考える前に、既存の不要物を除去する必要があるだろう。

『図書館案内』と称するパンフレットを開くと、大体どこの図書館のものも冒頭に蔵書数が記載されている。蔵書数の多さを図書館のステータスシンボルとみなす傾向があるように思えるのだが、これは私個人の偏見であろうか。蔵書数が多いことが即、有意義な情報を多量に有していることにはならない。利用度が10%に遠く及ばないような複本で蔵書数を増やすのではなく、ユニークで密度の濃いコレクションを有した図書館にしたいものである。本学図書館が電算化にむけて本格的に動き出したことにより、発注の一本化が計画されているが、これが単に事務処理上の省力化で終わってしまうのではなく、蔵書構成を見直し内容の充実を図るために、収書の質を高める起因となることを望んでいる。